

小泉ゼミナール活動報告

「都市」「横浜」を調べて歩こう！

【はじめに】

都市「横浜」を地理学の見方から深く学んでいる小泉ゼミでは、横浜の様々な場所について調べたうえで地図を見ながら現地を歩く、フィールドワーク（巡検）を行っています。ここでは、山手や関内地区を対象としたフィールドワークの振り返りを紹介します。

最初に訪れた昭和初期に日本人建築家が洋館を模して建てたアパートの内装が、アパートにもかかわらずとても豪勢で、当時はどれだけの身分の人が住んでいたのかを疑問に思った。

横浜都市発展記念館では、関東大震災と第二次世界大戦での空襲からのそれぞれの復興の違いを知ることができた。関東大震災では早く復興できたのに対し、戦後ではGHQによる占領の起点になり接収されたことで長い時間がかかったことは、史料をみて納得できた。さらに、横浜線は八王子から横浜へ生糸を運ぶことを目的だったことはあらかじめ知っていたが、そういった交通網の整備によって、小机など周辺の近郊農業が盛んになったことを知った。このように既存の知識から

繋がって学べることが非常に興味深かった。

また、都市発展記念館で最も印象的だったのは、関東大震災が起こったときの佐藤謙三さんの日記だ。地震によって建物が崩れ、その後火災が発生するまでの速さを、本人が書いた日記を目の当たりにしたこと、リアルをほんの少しだけ自分も体感したような感覚になった。これまで災害の様子は、テレビでの実際の映像や被災者のインタビュー映像などで知ることが多かったが、直筆の日記は実際の映像とは違った臨場感を感じさせた。

（人間科学部2年 齋藤翼）

自分が住んでいる神奈川県に、昔外国人によって占領されていた地域と外国人居住地区があったことはゼミを通して学習によって学んだが、現在においては観光地としてきれいな状態で保存されていて、中にまで入れることは知らなかった。空襲によって横浜市の大半が焼け消え、GHQによってかなりの間占領された。その空襲の時に港は計画的に燃やされなかったことも知り、当時どれだけ日本が手のひらで踊らされていたかを感じ

人間科学部 人間科学科 小泉ゼミナール

た。しかし、そのような過去を経た結果、現在の横浜の町並みや、雰囲気ができたと考えると悲しみと趣深さによって複雑な気持ちになる。そうすると都市デザイン横浜展で学んだ横浜の都市デザインに関わった方々にはもっと注目を浴びるべき存在だと気づけた。横浜市民ではないので総合学習で都市デザインについて学ぶかは知らないが、今回の巡検でそれほどの価値はあると感じた。

第一次世界大戦後、都市部への急激な人口集積によって住宅不足になった過去がある。そこで私たちの世代なら誰でも知っているような団地が登場した。私は、団地は第一次世界大戦前からありそうだと勝手に思っていた。江戸時代の近隣住民との監視し合う仕組みがあったからだ。また東急東横線は不動産を先に造ってから、路線を敷いたと知った。学校や、施設なども考えて招致し、町並みから造る計画を立てていたことに驚きが隠せなかった。しかし、そのように増やされた住宅は郊外では不要になるところもあり、人口減少や、少子高齢化にもなっているところもある。どうしていくことがその町のためになるのか、その地に住んでいる人々のためになるのかは、

まだすぐに明確化できるほどの知識を持っていないため、このようなゼミ活動を通して少しでも明確化できるよう励みたい。

(人間科学部2年 会沢 碧菫)

今回ゼミナール活動での一環として行った巡検を通してたくさんのことを学ばせていただきました。先日訪れた横浜都市発展記念館と横浜開港資料館では横浜という都市についてさまざまな視点から知ることができました。横浜都市発展記念館で特に印象に残っているのは企画展で展示されていた関東大震災の被害です。私自身、関東大震災の被害状況の写真を見たことがなく今回初めて被害状況を見ました。どの地域も地震によって変わり果てた町の写真を見て改めて自然災害の恐ろしさを実感しました。また、地震だけではなく火災も起きたことによつて多くの人々の命が奪われてしまったということを知り心苦しく感じました。特に印象に残っている写真は根府川の被害状況です。私は小田原市に住んでいるので自分が住んでいる地域がどのくらいの被害が出たのか知ることができたからです。

横浜開港資料館ではより詳しく横浜が開港したときの状況を表示されている模型や絵などを見ることができより理解が深まりました。まず、資料館の中庭にあるたまぐすの木が1854年にペリーが横浜村に上陸した際に右側に描かれている木であるということを知りました。火事や関東大震災で2回も焼けてしまったのにも関わら

ず今現在も立派に成長していることが植物の強さを感じました。そして、資料館の中に展示されていたものの中でペリーの似顔絵が印象に残りました。どの絵も特徴的で絵によって怖く描かれていたりすこしおとりしたような感じに描かれていたりとても興味深く感じました。

今回の活動を通して横浜の歴史や横浜を支え、復興、発展までの道のりについて学ぶことができました。より詳しく横浜にはどのような過去があり今に続くまでの発展や道のりについて学んでみたい意欲がより高まりました。

(人間科学部2年 諸橋 杏奈)

横浜市都市発展記念館では、1923年9月1日に起こった関東大震災による火災の被害で町が消失したところから今の横浜を作っていく生い立ちを学ぶことができました。復興には1億円以上使われ、1928年にはほぼ完成形となり今の横浜市の形となりました。現在の山下公園はがれきの埋め立てによってできたこと知り、私もよく山下公園に友人と訪れることがあったので感慨深い気持ちになりました。1945年5月29日に空襲が起こり、30万人以上が罹災し、アメリカによる政策が始まりました。都市部が重点的に焼かれたけれど、港が焼かれなかった理由は日本軍の負けを見越し、アメリカ軍がそこをオフィスに使うとしたためだと知り、すごく考えられているなど驚きました。

私は大学入学と同時にこの横浜市に引っ越して

きて、横浜市の美しい外観に感動したのを今でも覚えています。現在の横浜市がどのように作られてきたのかは、歴史が大きく関係していてその歴史とは災害であったり、戦争であったりと様々で、そこから多くの人の努力の成果で横浜は作られたのだと分かりました。

横浜開港資料館では、ペリー来航により日米和親条約が結ばれ、横浜が開港されたと学びました。通商条約で横浜以外に、函館、新潟、神戸、長崎が同時に開港されました。ペリーは日本人の細かさは世界に通用すると予言したそうです。ペリーの顔が書かれた絵がいくつか飾っており、面白かったです。横浜開港資料館は日米和親条約が結ばれた場所で中庭にある「たまぐすの木」は条約締結の時からあると伝えられています。

小学校、中学校で少し学んでいたペリー来航について今回の巡検によって深く学ぶことができました。実際にいるこの場所が昔はこんなことが起こったのだと知るのには、理解がしやすかったです。このような実際に足を運んで体で感じたり、実際の目で見たりすることの大切さを感じました。

大都市横浜の生い立ちは日本の歴史が大きく関係していたように、他の地域も歴史との関係は必ずあるのだと分かりました。もっと他の地域も調べてみたい、色々な場所に足を運んで学んでみたいと思いました。

(人間科学部2年 高久 さら沙)

今回の巡検では、横浜の街を回っていきま

が、横浜という街の成立過程や、災害などの被害、また外国との貿易港としての発展した側面といったところを見ることができました。例えば、元町商店街は景観と保つために様々なルールを定めた上で開発を行っていることがわかりました。建物の一階部分はアーケードとしてスペースを確保し、道幅にゆとりのある商店街を造ることができると。また道路に関しても、ただ真っ直ぐに延ばすのではなく、少し蛇行させ、所々に多少の段差をつけることで、自動車を通りにくい道路にし、他の道路へのルート変更を促したり、自動車が速度を出しにくくする効果が現れた。このように商店街を訪れる人たちが安全に買い物できるようにしている工夫が見られた。その中でも、横浜都市発展記念館では横浜の都市開発についての展示が多くあり、2つの発見がありました。1つ目は、横浜の都市開発は「市区改正局」という部署を設け、関東大震災前から行われていたことです。これは都市計画に熱心的であることを示していると感じました。しかし、これは関東大震災によって横浜が甚大な被害をもたらしたことで、都市計画の再構築を促し、市内の有力者によって「横浜市復興会」と呼ばれるものが作られたことを初めて知りました。2つ目は戦中・戦後の復興についてです。特に戦時下で、岸根公園といった空地や緑地を市街地周辺に設置していたことです。これは防空地や緑地という戦争のために設置されたものだが、このようなものは都市のスプロール化を防ぐ方法であるため、戦後都市開発にて良い影響をも

たらしたのではないかと思いました。このように横浜という街を見ていったことで、都市開発を行う上で、その時々で都市に影響する要因を踏まえながら開発を行うことが、その都市の住民を守ることにつながると思いました。

(人間科学部2年 高橋 佑来)

【おわりに】

私たちにとって身近な都市である横浜を改めて学ぶ良い機会となりました。横浜の当たり前が日本の都市の当たり前では決していないことを理解し、これからの横浜の学修を深めていきたいです。



写真：横浜都市発展記念館にて